

国立東京療養所 寿康館にて

新生

——ヨハネ伝第3章1～8節——

1956年9月23日

小池辰雄

人あらたに生まれずば 第二の誕生 水と霊とによって生まれずば 原始福音 キリストに同
化

【ヨハネ3:1～8】

「ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。¹
夜イエスの許に來りて言う『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神²
もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』³ イエス答えて
言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見る
こと能わず』⁴ ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生まるる事を得んや、
再び母の胎に入りて生まるることを得んや』⁵ イエス答へ給う『まことに誠に
汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。⁶ 肉
によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。⁷ なんじら
新に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。⁸ 風は己が好むところに吹く、
汝その声を聞けども、何処より來り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて
生まるる者も斯のごとし』

●人あらたに生まれずば

さあ今晚も、私は聖書の解説をするのではなく、皆さんと聖書のドラマの中に入ってい
こうとするのです。

パリサイ人で、その名をニコデモス（ギリシア的な名）という人がありました。彼は「ユ
ダヤ人の宰」即ち衆議所（サンヘドリン）の上一役であり、「イスラエルの先生」（10節）でした。
彼はある夜、イエスのところへやつて來ました。これは昼間だと、衆議所の連中に見つかつ
て、新興宗教のイエスの味方になるかとの誤解を虞たためと思われます。けれどもニコデ
モとしては、イエスがたしかにケタ違いの人物であることに心ひかれていたので、何とか
してイエスに對面してお話を聴きたいものと思つたわけではあります。

やつて來たのはよかつたものの、ニコデモの発言はまことに回りくどいようなものの言
い方ですね。



「先生（ラビ）、わたしたちはあなたが神から来られた教師（ディダスカロス）であることを知っています。神がその人と共に居てくだらないなら、あなたがなさっておられるような徴は、誰にもできはしません」

パウロが、

「ユダヤ人は徴を請い、ギリシア人は知恵を求む」（コリント前1・22）

と言いましたが、このニコデモも「徴」を問題にしています。事実、イエスが行われた徴は本もので、神が深くイエスと共におられたからこそのものでありました。しかし、ニコデモが徴という現象に囚われているところに、求むべきものを誤っている姿が見えます。ですから、イエスの応答がまるで別の角度からニコデモに、お面と打ち込んでいる感があります。

「本当に、本当に、あなたに言うが、だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできないよ」

まことに単刀直入の言です。序言もなければ、紆余曲折も辿らない。いきなり真理をガンと投ずる。今の人は説明が多すぎる。とくに学者はそうです。イエスやパウロやヨハネの如きみ霊の人は、研究的なものの言い方をしない。太い線で描くように確信にみちてぐんぐんと語ってゆきます。み霊に在る確信の言を、研究というメスで分析しても、実は掴めないどころか、せつかくの生命を殺してしまうのです。

私は思うのです。こうやって皆さんと静かに聖書を読みながら、深く聖書の中に投身し、瞑想し、祈って、ただ「アーメン！」と、それで終りとする。それが一番いい集会です。ちょうど、学校でドイツ語の本をよんで、朗読また朗読、文法や解説などなしで、ああいなあと感嘆して授業が終れば、それが最高の授業であるように。けれども、やむを得ず私は解説をしますが、どうかそういうわけで、解説をききながら、どこまでも聖書の現実への投身をしていただかないとつまらぬことですよ。

「誰でも新しく生まれなければ」

と。「新しく」という語は「アノーテン」というギリシア語で、「上から」という空間的な意味と、「新しく」という時間的な意味とがあります。空間的といっても、この場合、もちろん自然科学的現代意識で解したらダメです。「上から」とは次元的な上界で、

「霊界、天界から生まれてくるのでなければ」

ということです。また時間的に「新しく」というのも、質的な新しさであって、単なる時間的な新しさではダメです。即ち次元的に質的に「上から、新たに」という両義的な迫力が、この「アノーテン」なる響きであると思います。

●第二の誕生

さてニコデモは、イエスの言を掴み得ないので、



「人は年をとってから生まれることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができましたでしょうか」

と問いかけました。「上から生まれる」意も、「新たに生まれる」意も、ニコデモには何のことか解らなかつたわけです。イエスと他の人たちとの問答をみると、両者間の魂の在り方の次元の相違がよく解ります。これに対するイエスの答えが重要です。

私たちは、みな自分の誕生日を何年何月何日といって知っています。私は1904年2月7日、日露開戦その前夜の子です。しかし、これは「始めのアダム」(コリント前15・45)の裔^{すえ}としての、旧き私の誕生です。この旧き私の誕生日があるように、旧き私の死の日もそのうちやって来ます。それは旧き幕屋が破れる日です(コリント後5・1)。しかし、これに対して「終りのアダム」(コリント前15・45)たるキリストの属^{もつ}となつた日がクリスチャンになればなりません。いわば「第二の誕生日」です。肉の誕生に対する霊の誕生です。

ところが私の如きダメなクリスチャンは、キリストを信ずるようになって、なかなかこの第二の誕生を本当には為し得ませんでした。クリスト族、キリストという霊界の太陽の太陽族にはなれなかつたのです。今ははっきりとキリスト族と告白できますが、それは数年前のことで、さてそれが何年何月何日であつたと申すことができません。

しかし、そうであるからといって、私は自分の入信の年である1923年がいつわりであつたとは毛頭思いません。私の第二の誕生は正に今から30余年前に開始して、それが次第に進展し、特に数年前にあるはつきりした脱皮をしたと申すのが真相です。

何年キリストを信じ、信仰があると申し、聖書の研究を進め、ギリシア語やヘブライ語ができるようになって、どうしても、何か欠けている。否、あるつきぬけを経っていない、というのがクリスチャンの一般であるようです。少なくとも私は永年その一人でした。

それは要するに、イエスが

「上から生まれるのだよ」

と申される事態を本当に体験していなかつたからです。ニコデモに言われたこの新生を真に身に経験するまでは本格的なキリスト族ではありません。立派なクリスチャンが実は、信仰の事態を私していたり、また聖書学的であるだけで、真に聖書的、福音的ではない場合が多いのです。幾十年の信仰生活も、私にとって真の新生を迎えるためだつたと思うと、長大息せざるを得ません！ 噫^{ああ}、この新生！ 腸^{はらわた}の中に涙が湧きます。

そしてこの新生を体験してこれを告白し、原始福音への復元を唱道すれば、幾十年の旧知旧友から一線を引かれてしまうとは！ いま、私がイエス・キリストの聖言に全身をもつてアーメンを答へ奉ることが、どうして現代キリスト教界一般から白眼視されることになるのでしょうか。してみると問題の核心は実にこの新生の一事、この枢要^{かなめ}にあるようです。ですから、皆さん、今晚は皆さんにとつても、西か東か、生か死か、天か地かの天下わけの重大事なのです。



イエス・キリストの聖言は端的に、

「人新たに生まれずば、神の国を見ること能わず」

です。神の国は外からは見えないのです。中へ入ってみなければ見えません。どんな素晴らしい芝居も映画も、芝居小屋や映画館の外からは見えないわけです。ですから、新たに生まれるとは、神の国に突入する体当たりのことであることが解るでしょう。頭で解るのでもなく、心で感心するのでもなく、単に瞑想して悟るのでもなく、全霊全身をもって行為的に突入すること、それは全身全霊をもって行為的に受けとることでもあるのです。体受と投身とはこの意味では一つのことなのです。単なる能動でもなく、単なる受動でもなく、反動的 (reagierend) とダイスマンが申しましたが、大体そういった投身であり、体受であります。

イエスの相手ニコデモは、代表的ユダヤ人で旧約聖書に通じている「先生」です。そういった人に向かつて、新生を命ぜられたイエスです。即ち、イエスはイエスの新宗教が、祭司や学者たちの今までのユダヤ教に対して、ひとつの突き破り、突破をなすべきことを宣言しておられるのです。モーセに示された宗教を、その全き内実において示さんとしているのがイエスの宗教です。律法をのり越えて律法を豊かに成就する世界の開示です。彼らにとっては、これは新興宗教と見えたので、イエスを異端視しました。けれども、彼らはイエスの異端性において何か驚嘆すべきものを感じたのです。旧約聖書の本道を前進かつ突破成就している驚くべき事態であったのに、憐れむべき自己義認が彼らすべてをして自己に躓かせ、イエスに躓いていました。

パウロも、サウロとして未だユダヤ教の枠の中にあつて生粋のパリサイ人であつたとき、自分の信仰、信念、確信に満ちて、実に熱心でありましたが、そして事実立派で、

「律法の義については責むべきところなき」

ほどの模範的ユダヤ教徒でしたが、その熱心が「神の智慧（エピグノーシス）」に拠つていまいせんでしたために、イエスを信ずる徒輩を迫害して大いに自らを義ただとしていたわけです。現代でもカトリックの勢力の強い南米では、カトリック教徒が弱小勢力のプロテストントを迫害することがあると聞いていますが、これは宗教の世界で最も戒むべきことです。

そのサウロがダマスコ途上で復活のキリストの顕現に遭つて、完全に打たれ、サウロは回心！ 新生したことは、使徒行伝9章、22章、26章に三度証言されている通りであります。実に鮮やかな新生の出来事です。真の体験は決して主観的なことはなく、啓示的な出来事です。聖霊の御導き、御働き、み力によるものです。これは必ず全身的な全霊的な体当たりの事実であります。今のクリスチャンは、あれはパウロの特別な経験だとして、他人ごとの如く思っているようです。しかし、何らかの意味で同質的経験をもつところに新生が生ずるのです。

どんなにニコデモが立派な「イスラエルの先生」でも、イエスの眼からは瞭かに、川の



此岸にいるニコデモです。彼岸に渡っていないのです。イエスはとつぷり川に身を浸して彼岸に渡った人間です。イエスは、私たちにも同様、橋を渡ったり、舟に乗ったりして川の彼岸に着くのではない、身を浸して裸身でくるのだと申されるのです。従来の七つ道具をかなぐり棄てて、裸身で投身し、彼岸に新生するのです。洗礼をやかましく言う浸礼派の精神には大切な要素はあるのですが、問題は霊的現実であって、単なる外的な方法の問題ではありません。

無教会が洗礼聖餐をも問題とせず、信仰一点張りを主張することは結構なことですが、その信仰が果たして真にみ霊の現実となっているかに問題性があるわけなのです。無教会の私は、自らの信仰の遍歴史において、ここに画然と従来の信仰の現実からの突破を主の恩寵により、せしめられたのでかく申すわけであります。

福音がもし難しいというなら、その困難さは、実にこの新生の質の如何にあるのです。無学の人にも、大学者にも、一樣にかかってくる難しさであって、ヘブライ語がむずかしいなどという難しさではありません。しかし、この難しさは、これを乗り越えるのに何か条件が要するような難しさではない。もしある資格が要求され、準備が要するような難しさならそれは福音における難しさとはいえないわけです。

福音の難しさは全く逆説的であって、無条件的なるものを無条件的に受ける難しさです。福音は風呂のようなもので、本当に私たちを愛し、温めてくださるものであるのに、この風呂に入るのに何かを身につけて入るものだから、その風呂の有り難みが解らないというような難しさです。何と馬鹿げた風呂の入り方ではありませんか。誰が風呂に入るのに裸身にならないでしょう。日本人は共同風呂で裸身になることに馴れているとすれば、日本人ほど福音に入りやすい民族もなかうと一面思われるのに、それをしないのです。

信仰生活には死に至るまで諸々の段階があつて、これで終りということはありません。ですからパウロが、

「神の義は福音の中に顕われ、信仰より出でて信仰に進ましむ」(ローマ1・17)

と申すわけです。しかし、その道程において質的に画然と変化を来たことがまことの新生のときなのです。その変化も人によつては斬新的である場合もありますが、とにかく、自分でこれはたしかに内的に変わったと告白でき、み霊の御導き、み霊の御働きや内住を感謝することができるようになれば、それは新生をしたわけでありす。新生とは、最も内的な根源現象に関わる事態です。

●水と霊によつて生まれずば

ところで、第5節以下のイエスの言に立ち入るときとなりました。

「まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊によつて生まれずば、神の国に入るこ
と能わず。肉によりて生まるるものは肉なり、霊によりて生まるるものは霊



なり。汝ら新たに生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けど、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者もかくの如し。」(ヨハネ3・5～8)

即ち、新生とは

「水と霊によって生まれる」

ことであるとイエスは明言されました。学者はこれは、

「ヨハネ記者が、キリスト教がキリスト礼拝という形に確立してのちの洗礼のことを後からイエスの言として表現したのだろう」

と想像したりします。学者の研究や想像がたとえ当たっていようと、イエスがここで言わんと欲せられた内実は、それによつて左右されないと私は思います。

イエスがここで「水」と言われたとすれば、それは悔改めのバプテスマとしての「水」であると思います。「霊」言われたのは、み霊のバプテスマであることは明らかです。ヨハネ伝(1・26～31)を読みますと、洗礼のヨハネはその名の如く、「水のバプテスマを施す」者でした。共観福音書にももちろんこのことが記されており、それが悔改のバプテスマであることが明記されています。悔改、メタノイア、即ち心の方向転換、回心のバプテスマであります。それは新しき信仰への転向としてある意味で新生といえるのですが、新生の第一段階であつて、真の新生は聖霊による霊のバプテスマにおいて起こることなのです。いわゆる教会のバプテスマがこの「水のバプテスマ」を形式的にやっていて、悔改めすら内的に起こっていない場合が多いとすれば、なさないことです。ヨハネの授洗という外的行為が同時に内的行為として悔改が起こっていて初めて、水のバプテスマに意味があるわけです。

さてマタイ伝によると、

「ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給う。ヨハネ之を止めんとて言う、『われは汝に(霊の)バプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給うか』イエス答えて言いたもう、『今は許せ、われらかく正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』ヨハネ、即ち許せり。イエス、(水の)バプテスマを受けて直ちに水より上がり給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の鳩の如く降りて己が上にきたるを見給う。また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』」(マタイ3・13～17)

イエスは神の子でありまして、悔改のバプテスマはもともとと要らない。けれども彼は、人の姿をとり、人の弱さを担い、私たちと同じ次元に立たれて、私たちのなすべき悔改のバプテスマを、私たちをどん底から担う意味で受洗されました。罪を負う神の羔の面目であります。私たちの罪を罪とし、私たちの悔改めを悔改めとして、彼は受洗された。何と



それ自身、謙虚なイエスのすがたではありませんか。私たちはこれを傍観するをゆるさず、ただ主の愛の前に平伏すのみです。イエスの受洗の一行は今晚ひと晩、床の上に端座して瞑想、祈祷に何時間費やしても、受けとりきれぬ深刻かつ光栄の場です。聖書は限りなく身につけるべき書、ただ研究される本ではありません。一日一生、今日一生の書です。つねに新たに受けとり、満たされつつ、限りなく進んでゆくのです。

イエスは悔改のバプテスマを受けながら、同時にですよ、同時にみ霊のバプテスマを受けられたことは福音書の記事が証しする如くです。即ち、さきほど読みました如く、聖霊が鳩の如く彼の上にのぞみました。そして天来の神の声が、

「イエスはわが愛しむ子、悦びの子である」

としました。新約外典には「滝の如く」み霊が降ったとあります。私たちはしかし、外的現象に驚いたり、これを求めたりしてはいけません。そのような外的現象の起こるほどの内的現実と内的現象が、どれほど素晴らしいことであるかに想いを致すべきです。このときは、信仰は単なる観念の事態ではなく、全霊全身をもって投身体受している根源の事態であるのです。

イエスにおいては悔改と受霊とは一貫一相の事態でした。水と霊とは前段後段をなす全体的、全一的なバプテスマでした。それでこそ初めて、悔改が悔改であり、受霊が受霊なのです。それですからこそ、イエスが

「水と霊とによりて生まれずば」

と言われたのです。これをイエスの言として受けとるに何の不自然も私は感じません。エゼキエルに語り給うたヤハウエーの聖言にこういうのがあります。

「清き水を汝らに濺ぎて汝らを清くならしめ……我新しき心を汝らに賜い、新しき霊を汝らのうちに賦け……わが霊を汝らのうちに置き……」（エゼキエル

36・25～27）

これはやはり水と霊のバプテスマと同質の啓示であります。無色透明の清水というものは、心身が潔められる場として霊的な悔改に相應しいわけです。みそぎとか滝打ちとかいうことが、潔めや祈りの宗教的行為の場として役割を果たすのは領けることです。バプテスマのヨハネの浸洗もこれと同じことであつたわけです。問題は水そのものに何か神秘的価値をおくことではなく、水を外的な徴ないし場として、悔改の根源現象を内的霊的におこすことにあります。

水は悔改を象徴し、火は審判を表わします。それゆえに、マタイ伝では、洗礼のヨハネはこう言っています、

「我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後に来るものは、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん」（マタイ3・11）



火は終末的には滅亡への審判ですが、それまでは、私たちを審判きつつ救い給うキリストのみ霊の火です。審判の火も主は自らこれを浴びて恩恵の火に転じ給うのです。彼の十字架がそれでした。

●原始福音

さて、ロマ書6章を開いて、その1節から11節までをよく読んでみてください。ここにパウロが、いかに十字架のキリストと共に我らも「死に合うバプテスマ」を受け、復活のキリストと共に「新しい生命」に転ずべきかをたたみかけて強く唱えています。水のバプテスマは実にこの十字架による罪の潔めです。「旧き我^{われ}」という罪の主体が、キリストの十字架の贖罪の愛のゆえに、一たび死んだのです。過去・現在・未来にわたり、罪なる旧き我はすでにキリストの十字架の恩寵で十字架されてしまいました。何たる有難いことでしょう。もう私は自己の罪について本質的、根本的に何ら憂うるを要しなくなつたのです。悔改めとは、このキリストの贖罪の恩恵の実力が、私の胸中に起こす恩恵の事実であつて、自分で悔改めたところで、そんな悔改めはあてになりませんが、キリストが贖罪してくださいだったので、私の霊も心も身体も、方向転換を起こさざるを得なくなってきました。

一切の不義も病氣もキリストは完全に贖いかつ荷ってくださいだったので、本質的、根源的に、私は救われたのです。キリストの十字架は、洗礼のヨハネの水のバプテスマをその真の意味において満たしたものです。私の信仰がどうのこうのではない。キリストの実力ある恩恵が私を解放して旧き我を吹っ飛ばしてしまった。現実には相変わらず旧き我がいますけれども。しかし、このキリストの十字架と共に十字架されてみると、悔改めのバプテスマは既に本ものとなつている。これは直ちに主の復活の生命を、み霊の降下と共に与えられる前段であつて、全我がキリストの十字架上に投ぜられているのを真に信じた瞬間に俄然臨んでくるのは、み霊であり、復活の生命であります。

さればパウロは言いました、

「我らはバプテスマによりて彼と共に葬られ、その死に合わせられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦らせられ給ひし如く、我らも新しき生命^{いのち}に歩まんためなり。我らキリストに接がれて、その死の状^{さま}にひとしくば、その復活^{よみがえり}にも等しかるべし。……我らもしキリストと共に死にしなければ、また彼と共に活きんことを信ず」(ロマ6・4～8)

死生の転換は信仰の現実、真生命の呼吸であります。

かくて私も「旧き私」に死にました。「旧き」といっても単に時間的な意味ではなく、むしろ質的な「旧き我」というものに死んだわけです。相変わらず私はダメですよ。しかし、もはやそんなことは問題でないのです。それが問題なら、キリストの十字架という驚くべき恩恵の事実は何のためですか。キリストの恩恵の実力は、こんな私がダメであるなどの



問題をふつ飛ばしているではありませんか。

そんな自分をみてぐずぐずいつている人々をみると齒がゆくなる。ところが、これは実は非常に多いのです。どうか皆さん、このバカバカしい迷妄から豁然と眼をひらいてください。否、魂の扉をぶつ放してください。贖罪のキリストの血は、直ちに復活の生命の血として注がれてきます。

「わが血を飲み、わが肉を喰らえ」

との烈しいキリストの霊言を受けとってください。霊で飲みかつ喰らってください。私の救いのたしかさは、「私の信仰」というものには毛頭なく、キリストのこの贖罪、復活の事実とこの現実にあります。キリストは十字架の事実で、

「私はおまえを解放したよ」

と無言の言、事実の言で語っておられます。キリストが私をしてかく信ぜしめ給う。この事実をもつて。もはや何をか論ぜんやです。同様に、

「この永遠の生命を得よ」

といって、み霊を降し給う。キリストという磁極が磁性をこのようにして私に与えてくださった。どんな風が吹いて私という磁針は動揺しても、私は私の中のみ霊のキリストという磁性のゆえに、キリストという天極を指さざるを得ません。これ霊のバプテスマの証拠です、新生の証拠です。

いつ、どこでも、どんな状態に魂があらうと、環境がどうであらうと、一切無条件に、十字架のキリストは我らのために天界から我らを招き、

「あるがまま、そのまま無条件に我に来たれ」

と呼び給うのです。真の「思い遣り」をもち給うのは十字架のキリストのみ。そのほかに天上天下一人もことあるなし（ヘブル書4・16参照）。

ああ何たる実力の愛よ！ 限りなき生命、新生をもつてこれを裏付け給うとは！ 聖なる霊の生命！ このキリストの生命を何と換え得ますか、全世界とも換えられないのはこのキリストの霊生です、新生です！ ここに絶信の信あり、絶対の勝利あり。この生命を受けなかったら、人生、生まれ甲斐がありません。この生命を賜った者は、どうしてもこれを人に告げないではいられません。

「友らよ、キリストに来たれ！」

とは必然の叫びとなります。全実存を告白となし、叫びとなし、愛となし、霊燈となして生きてゆくのです。燃えてゆくのです。

「原始福音！ 使徒たちがキリストを身受し、キリストに投身した如く信ぜよ！」

と叫ぶ次第です。キリストの福音と、このキリストの福音に全実存をもつて応えた使徒たちの伝えしめられた福音とは、火花をちらして一体となっているのです。

それを我は「原始福音」と申すのです。原始福音 (Urevangelium ウルエバンゲリウム) ！



この言葉を嘲った学者がいます。私はむしろその学者を気の毒に思いました。私は誰かヨーロッパの学者でこの語をつかつている者がいないものかと、神学の本を読むことに注意していましたら、最近、発見したのです。それは余人ならぬ碩学、アドルフ・ダイスマン (Adolf Deissmann) がその「使徒パウロの世界」(“Die Welt des Apostels Paulus”) という詳細なパウロ伝道の地図の中に「イエスの原始福音」(Urvangelium Jesu) という語を用いていたのです。私の用法は狭義ではこのダイスマンの用法に等しいですが、広義では新約聖書全記者の伝えた福音の真骨頂を目ざしての意味です。このダイスマンにおいて同語の使用を見た瞬間、私は正直、涙がにじむほど嬉しくありました。

たといダイスマンが用いなかったとしても、私はこの語、原始福音をもって「キリストの福音」としての新約聖書全体を呼ぶにためらいません。しかし、キリスト教界一般が真に使徒的信仰に立ったあかつきには、ただ「福音」でもちろんよいのです。その日の来らんとことを悲願いたします。しかし、それまでは使徒たちと共に叫ばざる得ません。パウロはテルトロに

「ナザレの異端の首」^{かしら}

と悪口されました(使徒行伝24・5)。パウロはこれに対して総督ペリクスの前で弁明しました、

「我ただこの一事を汝に言いあらわさん。即ち我は彼らが異端と称うる道に^{したが}循いて我が先祖たちの神につかえ、律法と預言者の書^{ふみ}とに録したる事をことごとく信ず……」(行伝24・14)

このパウロはいま、私の叫びを天上から応援してくれているのを私はみ霊にあつて^{あきら}瞭かに知ります。しかのみならず、主イエスも私たちのために、パリサイ的なキリスト者たちの批判に対して、天上から今日もなも、

「われ汝らに告ぐ、此のともがら^{もた}黙さば石叫ぶべし」(ルカ19・40)

と告げておられると信じています。主が味方であり給う限り、私は大なる平安と勝利にあります。そはすべて主のもの、平安と勝利と栄光と、主とその原始福音にあれ！

●キリストに同化

「風はおのが好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処^{いずこ}より来り、何処へ往くを知らず、すべて霊によりて生まるる者も^か斯くのごとし」(ヨハネ3・8)

何と飄々^{ひょうた}乎^こたるみ言でしょう。大自然よりも自由なるイエスの魂。またその息吹。「霊」も「風」も「息吹」もみな同語です。ヘブライ語でも、ギリシア語でも。私たちの肉体が大気につつまれ、大気を吸い、風に吹かれているように、どうか私たちの魂がキリストの靈気に包まれ、吸って生きるように。十字架という狭き門をくぐったら、そのさきは広大無辺な復活の天地、新生の樂園、キリストのみ霊の靈氣^{かぐわ}香しき現実です。聞く耳ある者は



聞くべしです。イエスがさきに、

「肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり」(ヨハネ 3・6)

と言われましたが、パウロも、

「血気の体にて播かれ、霊の体に甦らせられん」(コリント前15・44)

と言っています。み霊によつて生まれた者は、この霊体をすでに胚珠として具有しています。ですから「永遠の生命」と謂われるのです。

「汝ら新たに生まるべしとわが汝に言いしをあやしむな」(ヨハネ3・7)

この「べし」は強い「べし(デイ)」で、

「おまえたちは新たに生まれることを(絶対に)必要とするのだよ」

との意です。換言すれば、

「新生しなければどうにもならんよ」

ということです。しかし、新生してみると、風の如くであり、また花の香の如くであります。つかめないが、実在し、流動している。キリストから来るこの風を、この香を身を感じ体に吸い込むのです。煙草を吸うよりはるかに素晴らしい爽快味であり、力であり、生命であり、愛の流れであります。

このような生命の現実への門は祈りであります。十字架のキリストに投身し、復活のキリストを身受する祈りにおいて、この霊風は流れてくるのです。そのよき霊が呼吸し始めるのです。魂の呼吸を体得し始めたら、永遠の生命の味がわかってきます。新生！のよろこびです。この新しき生命は限りなく進展します。それはパウロが申しているように、

「栄光より栄光に進んで、遂にキリストの像に化する」

に至るを目的としている。キリストからの生命の核、原始核ですから、キリストという霊体へと変質変貌(メタモルフォーゼ)を起こしてゆく。ここに人生の目的があります。しかも各個人の個性はいよいよあきらかとなり、千変万化をもつてキリストに同化してゆく。

「驚くべし！ この新生！ もう人生の問題が、どう風が吹こうが、嵐となろうが、波が立とうが、津波になろうが、どつこい大丈夫！ 私のうちにはキリストの生命が漲りあふれているぞ、限りなく展開しているこの内的現実を見よ！」

と皆さん、告白できるようになつてください。否、もう告白できますぞ！

そして日本の力は、日本人の本当の力はこの原始福音的新生のほかにその源がない。ここから力は湧いてくる。その外に絶対にはないのです。日本が、いまの教会、無教会がこの原始福音を受け、これに突入しないでどうして真の進展がのぞめるでしょうか。偉大なる文化はただこの新生から展開するのです。私は日本をこの角度からしか愛し得ないのです。私の愛の源泉は原始福音にあります。

(『愛泉』誌第7号、1956年10月30日発行より転載)

